ビブリア No. 23
福島高専 図書館報

発行 いわき市平上荒川字長尾30
福島工業高等専門学校
編集 図書委員会
昭和51年11月29日

特集

限りなく 透明に近いブルー

4年生の読書感想

まえがき

『限りなく透明に近いブルー』(村上 龍)――この小説ほど近頃のマス・コミの話題となり，かつまた，売れに売れた本も珍らしいのではなかろうか。もともと「芥川賞」受賞作品は，文学愛好者の間だけで話題にのぼっていたものであるが，いつの頃からか，多分 石原慎太郎の「太陽の季節」が受賞した頃から，受賞者は同時にマス・コミの寵児として脚光をあびるようになったのである。

「太陽の季節」の登場人物の行動が，同時に，作家やその仲間たちの行動と重ね合わされて，マス・コミの興味の対象となったのと同様に，今回も，村上龍はマス・コミに追いかけられているようだ。スターにはプライバシーの権利も保証されていないのが，今日のマス・コミ界の姿である。かっての「太陽族」という流行語に代って，そろそろ「透明族」「ブルー族」という言葉がはやり始めているようだ。そういえば〝不透明な灰色〟というのも問題になっている御時世なのだから，昭和51年の日本は，まさにカラーの狂騒曲にあけくれしたと言えそうである。

それはさておき，私は，4年生の倫・哲の課題としてこの本の読書感想を求めた。文学作品としては，いささか特異にすぎるこの作品も，現代青年論としては，格好な素材であるからである。果して，「不愉快」「生理的嫌悪をもよおす」という〝健全な反応〟が返ってきた。しかし，その段階に止っているのでは，いささか幼稚すぎるのではないか。この生理的反応の段階をつきぬけて，どれだけ自分のイメージをふくらませることができるか，どれだけ作品の背後や背景に思いを馳せることができるか，それが書き手の力量というものである。

だが，4年生全員141名の感想文を通読して，その大部分が似たような内容と文体であることに驚いてしまった。レベルが高いと言えば聞こえがよいが，紋切り型であると言えばケナシ過ぎであろうか。感想文にまでJIS規格のようなものがハバをきかせているような気がしたのである。ともかく，それらのJIS合格品の中から，何らかの意味で際立っているもの4篇をここに掲載することにした。それぞれ書き手の個性がはっきり出ている作品である。

これを手掛りとして，もう一度『限りなく透明に近いブルー』に挑戦してみるのもよかろう。しかし，少々くたびれた，というのが，大方の実感ではなかろうか。(各篇の標題は，編集者が独断でつけたものである。筆者の意に反していれば，お許し願いたい。)

芋川平一

「黙示的文学」

4M 清 水 弘 泰

最初の第1ページで，今までの小説の読み方ではだめだと感じた。作者が論理的に説明してくれる部分がないのでサッパリつかめないのである。ここではただ作者は伝送器である。彼は単に，我々の脳裏に画像と音とにおいを映すため，手をかすだけである。彼の与えてくれる動きや音・光・においを，我々は自らのイメージとして再構成し体験するだけである。送られて来るものを客観視し，そこから作者の経験を得ることは不可能である。

この小説を読み終わる前にもし「彼はいったい何を経験したのか，どんなことを伝えたいのか？」と疑ってはならないのである。そうやって文章や文体を探ってもそれは得られない。もしあるとすればそれはまさしく自分の中にある。スピーカから流れる名曲を聞きながら「いったいこの曲は私に何を伝えたいのか？」と疑って，たちまち聞くのをやめて，スピーカに流れる電流や波形を探って見るのと同じである。我々は小説が提供してくれるものをすなおに脳裏に納め，そこで構成された体験から何かを経験するのである。名曲を聞くことによって何かを感じ体験し，経験はその人のものとなる。小説を作者の思想なり経験なりをこちらにも送ってくれるものと誤解しているとこの小説は読めない。何もわからなくなるのである。何を言っているのだろうかと不安になるのである。実際作者は何一つ言っていない。

作者はこちらに音・光・動き・においだけ確実に提供してくれる。彼がそれによって得た経験や事実は何一つ外にだしていない奥にしまいこんでいる。まさに作者村上龍氏は彼自身に映った起伏を我々の網膜にも映す（もちろん，本来の網膜には活字しかうつらないのだが，誰でも別の網膜のあるのを御存知と思う。）

作者は認識・経験・体験の主体性を我々に与えてくれている。反面，苦痛の連続である。彼はヒントをすこしもくれない。作品全体を通して詩的・黙示的でさえ思われる。

客観的にこの小説を読むならばそれは「見る」と言った方が適切である。客観的にしか作品を見ないと，文学的な技巧やテクニック構成力のみしか見えない。作者が映したものなど，その人には映らないのである。なぜならば，我々が小説に主体的に関わっている時には，それを客観視することができないためである。我々はこの小説から何かを得るためには，主体的にイメージを構成していく以外にないのである。小さいころ，おとぎ話を本で読んだように。

登場人物について，最初個性を見いだすことは困難であった。前半彼らは我々とほど遠い存在である。最後まで彼らのあの姿を見ることになれば，この小説はまったく現実性を感じさせずに終ったであろう。しかし，後半彼らの正体はごくありふれた弱い孤独な若者であったことがわかる。私はここで彼らの存在をいっそう現実的に体験した。（もちろん断固として私の意見に反対する人もいるだろう。）普通の生活で満足している人間は，彼らを普通の精神の持ち主として認めたがらないものであるだけに皮肉である。

彼らが口々に明らかにした認識や願望はみのがすことができない。後半での彼らの争いは作品の重要な転換部であるように思われる。

彼らの会話には，彼らがいかに必死で生を求めているかを知ることができる。彼らは，あまり情熱的で素朴すぎるため，適当にうまく生きている若者よりもいっそうみじめなのである。あまりにひたすらで弱いため社会からはみ出るのである。

ヨシヤマがケイを必要としているのを意識したその時点で，ケイは彼にとって単に必要な「もの」だったのだろうか。もしそうであれば2人の関係は「どうしようもない」ものである。オキナワとレイ子も結局は相手にみじめな側面をさらけだされ，場面から消えていったように思える。彼らの心理は印象深い。

最後に展開するリュウの病的心理状態は興味深い。精神病理的に見るならば，人格の分離であり，離人症的なものを含む複雑な体験と思われる。技巧は，ステレオドラマなどで使われる手法に似，よい効果を出している。

作者はリュウに，町全体が恐ろしい黒い鳥であると言わせている。町は都市だろうか，それは社会かもしれない。それはリュウを自分がわからない状態（自己喪失・自己疎外）にし，彼がみようとするものをかくす，また彼をのみこみ殺すのである。そこから回避するには（苦しみをのがれるためには）蛾のように死んで固くなる以外にないと言う。悲観的な認識を暗示しているところと思われた。

彼は最後にある体験によって目ざめる。そして，とても楽観的な彼の希望を映して，この小説は終っている。なんとなくホッとした気持をこちらも味わい，すがすがしかった。最後まで作者の体験が私にも映ったのであろう。

ひょっとすると，これを読んだ人々はリュウの生き方に賛成するかもしれない。しかし，たいていの人は片足でさえ彼と同じ状況に入ることができないと思われる。

現代においてなんらかの固定した価値感やイデオロギーなしに――いわゆる「からっぽ」の状態で――世界に臨むことがいかに勇気の要することか人々は理解

していない。そうすることにより，たちまち全世界が彼に沈黙するからである。

今日どれだけの人々が自分の状況や生活によって理想をうばわれているのだろう。又どれだけの人々が半ば精神が死んだ状態（物事をありのまま見つめ，矛盾を見ぬくのに鈍った状態）に陥ってしまっているか。

本気で生きようと必死になっている人間とは，実は殺人者や非行少年の異名なのでは。そんなことをあとになって考えさせられた小説であった。

END

「夜明けのうた」

4E　渡　部　　誠

夜の冷たい風が草木に露を降ろす頃，暗闇の端がうっすらと青味を帯びてくる。小さな丘や，公園の並木や，工場のえんとつや，重なるビルの影がブルーの中から浮び上り，暗闇を煌煌と照らしていた街灯がぼんやりとブルーの中に沈んでゆく。やがて，重々しく沈んでいた静けさがゆっくりと動きはじめ，朝の光が射しはじめるころ，夜明け前に生まれたブルーがそれぞれの朝の光の中に散ってゆく。そんな朝の風景が好きだ。

昼と夜，という全く対称的な空間の時間の流れの中のその連続的に変化してゆく光の中に「限りなく透明に近いブルー」があると思う。けれどそれは連続的なはずなのにいつも夜明け前の空間の中に，ブラックホールならぬ透明なホールの様に全ての時間を飲み込んでしまって，いつの間にか朝になってしまうので，誰にも気付かれずにある。けれどその時間と空間こそが私たちの，今の，空間につながるのだろうと思う。

麻薬と，セックスと，ロックに明け暮れた若者たちの物語。こんな彼たちにはじめは，賛成できなかった，ある反感さえ覚えた。しかし，リュウたちと私たち，そして，とうの昔にこんな時代を過ぎた人たち，これから迎えようとする人たちの，そこにある青春（と簡単に呼べるものではないけれど）は形こそ違い本質は同じなんだろうと思う。

麻薬，セックス，ロックのために白視視され，世間からはみ出た若者たち，またそれ故に麻薬，セックス…に明け暮る若者たち，そんな彼らが求めたものは，その不安定な立場をはっきりさせる事，その彼らの行為はその不安定な立場故の彼らの自己主張ではなかったろうか，それも未熟で純粋なもの。なぜなら，彼らは一人で生きていた。けれど，結局ケイを失ったヨシヤマのとった行動は自殺。家出した女の子が，ウサギをオメガと取り換える。死んだその女の子の父親に悪いといって，田舎へ帰るかもしれないという男がいる。みんなとっても純粋なんだ。しかし，電車の中で女に乱暴する場面がある。乗客は，そんな彼らを動物園の檻を覗き込むように見ている。この時の彼らの行為は純粋だと言えないにしても，他の純粋な行為に対して世間の人はいつも彼らをこんな風に見ているんじゃないだろうか。彼らを世間からはみ出した若者と呼ぶのはまちがっている。はみ出して見ているのは世間の方なのではないだろうか。

なぜなら，人生っていうのは，一日，昼と夜とにたとえられると思う。そして人生っていうのは必ず夜から始まって，（朝），昼，そして夜っていう風に終わるのだと思う。その夜から朝，昼への間に限りなく透明に近い彼らの（そして私たちの）時代がある。これは，その前後と継続的に絶対つながっていなければならないのだけれど，限りなく透明に近いその空間は他から気付く事ができなくて，そこにいる彼らの行為は，その不安定な未熟さ純粋さ故に大きく浮び上ってしまい，他の時代からはみ出して見られるのではないだろうか。

そして，こんな風に葛藤を繰り返しているうちに夜が明けるのである。

最後にリュウは，夜の闇の向うで巨大な黒い鳥が飛んでいるのを見る事ができる。あまりに巨大でほんの一部しか見えなかったために不安定だった自分の立場をはっきりさせる事が出来たのだと思う。彼らは一周り大きく成長したのだと思う。彼は夜明けの空気に染まるガラスの破片を通して限りなく透明に近いブルーという青春の終わりを見つけたのだ。

著者はリュウをまだ殺してはいない。だって人生はまだ始まったばかりだから，彼はまだ生きている，限りなく透明に近いブルーな時は終わったけれど。そしてこれから，砂漠でミサイルに爆発しろって叫んだ男の様に，巨大な黒い鳥を殺すために生きてゆくだろう。なぜなら，それが彼の人生だから，そして，リュウが実は私たち自身の姿であること，そして全ての人間はこの巨大な黒い鳥を見つけ殺すために生きて行くのだろう，という事を忘れてはならないと思う。

（おわり）

「文明って何だろう」

4C　鈴　木　ひとみ

この本を読みおわったときの気持ち，一回目「描写が鮮烈だなあ。」二回目「きれいだなあ。」きれいだというよりも，美しいといった感じ，すきとおった感じなのである。べつに題名に影響されたわけではないのだが，なんとなくとらえどころのない美しさが全体をつつみこんでいるといった感じなのである。もしちがう題がついていても同じように感じたにちがいない。すきとおっているといっても，ガラスなんかのやすっぽい透明とはちがう。水のようでもなく，水晶のようでもなく，何というかこう，無理に表わすと，すきとおったかすみがかかっているといったふうになるだろう。

とにかく，麻薬にひたっているときの描写の美しいこと。世間では落伍者として扱われている人々，その行為さえも悪いことだとは思わせなくなるような白昼夢の描写。特に，頭の中で一つの都市をつくりあげて自分のすべて――自分にとっては，これが全世界であるというもの。他人にはわからない――を入れてしまう。意志が弱くてすぐに麻薬に手が出てしまうような人の，内向性のあらわれだと言ってしまえばそれっきり，味も素気もなくなってしまう。しかし，うまくいえないが，このような人たちが，俗悪なもの，たとえば常識とか教養とかに縛られない，いちばん純粋な何かを心の奥底にもっているのではないだろうか。何かにたよらなければ決して表面には出てこないのだが。

しかし，ここに登場する人々は，人間，いや動物の本能からくる感情までなくなりかけている反面もある。人間は昔から，――有史以前は知らないが――途中で乱れはしたが，一応一夫一婦制である。ということは当然嫉妬という感情がうまれてきてよいはずであるが，なぜかここに登場する人々には，それがない。ただ一人，ヨシヤマだけが嫉妬を感じ，それをケイにぶつける。が，ケイは冷たくつきはなしてしまう。冷たいのではない。それが，いちばんすなおな心の表現なのである，他の人々と同様に。

人間は，正気のときには，常識・世間体・しきたりなどにじゃまされて，自分の思うように行動できない。しかし，正気でなければ自分の思うようにどころか，無意識のうちに本能（古い大脳皮質のなせるわざだといわれているが）にしたがって行動するようになってしまう。動物的な本能にしたがって行動をとるというと，やはりいちばんはじめに，セックスのことが出てくる。ここに登場する人々もそうである。この人々にとっては，一夫一婦制は何の意味ももたないのだ。自分の欲望のおもむくままに床をはいずりまわり，てきとうな相手を見つけて，というよりもモコなどは手あたりしだいといった感じに，なめまわしたり，体の中に入れたり。自分の欲求を満足させるまでくりかえし，あきるとやめて，こんどは食べはじめる。ジャングルや，大草原にすむけものたちと何の変わりもない，動物本来の姿である。すなわち，人間本来の姿なのである。私はこの人々を，正気でない時にかぎってではあるが，純粋できれいだと思う。というよりも，なぜ文明の発達にともなって常識・教養ばかりが大きくはびこり，人間本来の姿がしだいに忘れられてしまったのかと考えてしまう。前に，ヨシヤマがただ一人だけ嫉妬の感情をもっていていちばん人間らしいと述べたが，このときの〝人間〟というのは，常識社会に似合った文明人をさしている。彼も文明の被害者なのだろうか。

この本の内容は，常識で考えると，とても不潔であり，いやらしさでいっぱいである。特に，台所の描写，ゴキブリ，はいた物などはもう気持ちが悪くて読む気もしなくなるし，パーティーの描写などは，昔かたぎの親父様連に見せたら，女の子のくせにこんなものを読んで，とものすごいけんまくで怒鳴られそうである。それなのに，読むにつれてそんな考えはなくなっていくのである。一度目よりは二度目，それよりは三度目と，最後には，美しいとさえ感じるようになってしまうのは，登場する人々の純粋さ，すなおさが光っているからではないだろうか。内容では，薬にひたっている場面しか描かれていないが，この人々が正気になっている場面を私は見たくはない。純粋さ，美しさがこわれてしまいそうな気がするから。この純粋さ，美しさは，とてももろいものだから。

人間のほんとうの心・行動を，常識の名のもとに心の奥底にとじこめてしまった文明を憎く思う。何が良くて何が悪いというのではなく，ただそう感じるのである。こんなふうに感じるということは，私もすでに世間からは落伍者とみられる人々と同じ心になりかけているのだろうか。

全部読みおわったとき，自分はただ一枚の絵をながめていたんだという気がした。

「毒には毒をもって」

4土　佐　藤　　護

とにかく驚いた。大変なものが芥川賞を獲ったものだと思った。この作品は随分世間を騒がせたようだが読んでみて初めてなるほどと首肯けた。奇抜そのものだ。

日本は古来，内部からは決して崩壊せず，外部からのみ崩壊するものだと言われてきたが，戦後，欧米（特にアメリカ）の悪い面を吸収しすぎてじわじわと日本人の精神がむしばまれている。この作品は，その癌ともなるべきところをぐさりとえぐり出したと思う。

言葉使いに何の躊躇もなく，危なっかしい用語が次々と出てくるこの作品は実に強烈な印象を与えてくれる。本全体が常に生臭い臭いを放ちながら描く呕吐と幻覚の世界は読む者の頭を少なくとも一回は混乱させる。作者の敏感な観察力なくては出来ない業だ。それゆえ終結部の清澄な夜明けの風景描写は最後で最初のすこぶる新鮮な表現であると思う。そういった意味では，やはり芥川賞に値する作品なのかもしれない。

この小説の中の人物たちは皆くたびれているように思われる。こんなことを言うと頭がおかしいと思われるかもしれないが，私は読みながら何度も彼らの内臓の色を想像した。彼らの生活から連想できるそれの色は茶褐色だ。けっして健康なピンク色ではない。おそらく肺はその３分の１の機能しか持たないように思える。麻薬を常用すると体がぼろぼろになって死ぬということを前に聞いて知っているから，こんな考えを持ったのかもしれない。

村上龍は表現方法に巧いものを持っている。特に汚いものの描写は素晴らしい。芥川龍之介の「偷盗」を想い出させるぐらい巧い。しかし「限りなく透明に近いブルー」は人間の臭いがほとんどしない。するのは汚物の臭いばかりである。少なくとも「偷盗」には人間愛や兄弟愛があった。ところが「限りなく透明に近いブルー」の中の人間はエゴイストと，理性も知性も失って本能のおもむくままに走る者ばかりである。そんな哀れな人々も時には憩いを求めて集う。そこは彼らにとって一種のささやかなコミューン（共同村）でもあるようだ。そしてパーティーが開かれる。ロックミュージック，ＳＥＸ，薬などしか彼等にとっては他に楽しみがないというのか。私には到底理解出来ないと同時に軽い彼等に対する同情を覚えた。更には，この作品の中の人物が明日の自分の姿になるかもしれないという恐れを覚え，この世界は小説だけの世界であってほしいと願いたいが所詮，空しい願いであろう。

前にＮＨＫの朝の番組でこの芥川賞新人作家が紹介されたのを見たが，ブラウン管の中の彼は妙にツっぱっていたように思える。ぼっちゃん育ちの人が変に，社会からはみ出した階級の人に憧れて，自分を同化させてしまって，「どうだ，オレはかっこいいだろう。」と言っているように思えてならなかった。それは丁度ヤクザ映画を見てぐれたふりをするのと似ている。しかし彼はこの小説の中の世界の人たちの生き方に反省することをそそらなかったわけではない。主人公に「限りなく透明に近いブルー色をしたこのガラスの破片のようになりたい。」と思わせた。それは清純への憧れであるとともに，人間らしかった頃への懐古の念である。

我々は内部崩壊しつつある今の日本についてもう一度考え直す必要に迫られている。さもないと現在のアメリカのような殺伐とした国になってしまうだろう。この「限りなく透明に近いブルー」のような毒毒しい小説が，毒には毒をもって……の効用となるべく願っている。

新着図書目録

※印は図書館他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総　　記

東洋文庫　284　小梅日記　平凡社※
　285　子育ての書 1　同　※
　286　漢字の世界 2　同　※
　287　北京の伝説　同　※
　288　花燈地錦抄　草花絵扇集　同　※
　289　中国の茶書　同　※
　290　アラビアンナイト 8　同　※
　291　将門記　同　※
　292　神国日本　同　※
　293　子育ての書 2　同　※
　294　モンゴル秘史 3・チンギスカン物語　同　※
　朝日新聞縮刷版　昭和51年3月～6月号　朝日新聞社※

　朝日年鑑　昭和51年版　戦後30年世界史年表人名録　朝日年鑑1976年版別冊　同　※

　出版年鑑1976　出版ニュース社

叢文庫　第1冊　あ　名著普及会※
　第2冊　あ～い　同　※
　第3冊　い～え　同　※
　第4冊　お～か　同　※
　第5冊　か～き　同　※
　第6冊　き～く　同　※
物集高見他
　辞書索引　第1冊　あ～こ　同　※
　同　第2冊　さ～の　同　※
　同　第3冊　は～お　同　※

　本居宣長全集16　筑摩書房

近藤　杢　支那学芸大辞典　立命館出版

高階秀爾編
　文化の発見（人間の世紀3）　潮出版社
神川信彦編
　政治と人間（　同　5）　同
草野日出雄
　写真で綴るいわきの裏の民俗　はましん※

　万有百科大辞典16　物理数学　小学館※
　同　別巻1　日本大地図　同　※
　同　21　索引　同　※
　同　別巻2　世界大地図　同　※

内野熊一郎他
　中国古典新書　呂氏春秋　明徳出版
日本図書館学講座
　4　公共図書館　雄山閣※
　5　学校図書館と児童図書館　同　※
　9　情報検索　同　※
日本の名著
　11　中江藤樹　熊沢蕃山　中央公論社※
市野沢寅雄
　唐詩話（中国古典新書43）　明徳出版
　三枝博音著作集 2　中央公論社※
世界の名著
　続13　ヤスパース・マルセル　同　※
富山房編集部編
　漢文大系17　富山房
新選名著復刻全集近代文学館
　学問のすゝめ（全）　ほるぷ

　The Readers Digest Great Encyclopedic Dictionary　Readers Dgest

哲　　学

田中　元　古代日本人の時間意識　吉川弘文館

笠原一男　女人往生思想の系譜　同

中村宗一　正法眼蔵用語辞典　誠信書房

日本思想史講座
　2　中世の思想 1　雄山閣※
　5　近世の思想 1.2　同　※
　7　近代の思想 2　同　※
エリアーデ著作集
　1　太陽と天空神　せりか書房※
　2　豊饒と再生　同　※
　3　聖なる空間と時間　同　※
　4　イメージとシンボル　同　※
　6　悪魔と両性具有　同　※
　7　神話と現実　同　※
　8　宗教の歴史と意味　同　※
　9　ヨーガ 1　同　※
　10　同　2　同　※
　13　芸術と宗教学　同　※

井上光貞　日本古代仏教の展開　吉川弘文館

バジルウィリー
　十八世紀の自然思想　みすず書房
A. ヤッフェ編
　ユング自伝 1　思い出　夢　思想　同
　同　2　同
C. Gユング
　分析心理学　人文書院
　心理学と錬金術 1　同

ヴィトゲンシュタイン全集
　第3.4.6.7.8巻　大修館書店
カント全集
　10　自然の形而上学　理想社
陽明学大系
　1　陽明学入門　明徳出版※
　2　王陽明　上
　3　同　下　同　※
　9　日本の陽明学　中　同　※
バーネット
　初期ギリシャ哲学　以文社
アジアの仏教史
　中国編Ⅳ　東アジア諸地域の仏教　校成出版※
近代日本思想大系
　17　吉野作造集　筑摩書房※
　19　山川均集　同　※
　28　戸坂潤集　同　※
　30　明治思想集　同　※
日本人の行動と思想
　15　日蓮―その行動と思想　評論社※
　16　江戸幕府の宗教統制　同　※
　17　近世の流行神　同　※
　18　近代社会と日蓮主義　同　※
　31　明治の仏教その行動と思想　同　※
　41　連歌師その行動と文学　同　※
世界の大思想
　19　プラトン　河出書房※
　20　アリスト.テレス　同　※
飯島宗享編
　実存思想と可能性（実存主義講座4）　理想社
ベルグソン全集
　1　時間と自由アリストテレスの場所論
　2　物質と記憶　白水社※
　3　笑い持続と同時性　同　※
　4　創造的進化　同　※
　5　精神のエネルギー　同　※
　6　道徳と宗教の二源泉　同　※
　9　小論集Ⅱ　同　※
増谷文雄　現代語訳　正法眼蔵　3－8　角川書店※

日本思想大系
　38　近世政道論　岩波書店
　56　幕末政治論　同
中村元選集
　19　普遍思想　下世界思想 3　春秋社※
増谷文雄編
　現代青少年の宗教意識　すずき出版※
オルテガ著作集
　2　大衆の反逆　無脊椎のスペイン
　7　世界史の一解釈　白水社※
　8　小論集　同　※
世界の思想家
　6　ガリレオ　平凡社※
　8　パスカル　同　※
　9　ルソー　同　※
　12　ヘーゲル　同　※
　16　マルクス　同　※
新井　智　聖書その歴史的事実（NHKブックス250）　日本放送出版協会※
今枝愛真　道元　（同　255）　同　※

F. フェスター
　考える・学ぶ・記憶する（ブルーバックス B－288）　講談社※

朱子学大系　第10巻
　朱子の後期 上　明徳出版※

歴　　史

　朝日新聞に見る日本の歩み・安保体制下の国造りⅣ　昭和28－35　朝日新聞社※
相賀徹夫編
　全史 第二次世界大戦実録1－3　小学館※

頼山　陽　日本政記　白川書院

日本地誌　13　近畿地方総論　三重県　滋賀県　奈良県　二宮書店

20 佐賀県 長崎県 熊本県 同

黒板勝美 新訂増補・国史体系・日本後紀 吉川弘文館
同 続日本後紀 同
同 日本文徳天皇実録 同
同 日本三大実録・前篇・後篇 同

大野達之助
日本後紀・続日本後紀・日本文徳天皇実録索引 同
岩波講座 日本歴史 中世 3 岩波書店
同 近世 3 同
ワロン・ツォーワ
コワレフスカヤの生涯 東京図書※

吉村作治 エジプト史を掘る（NHKブックス257）
日本放送出版協会※
谷本 清 広島原爆とアメリカ（同258） 同 ※
白川書院
田淵安一 西欧人の原像 人文書院

萩原實編 十勝開拓史 名著出版

栗原隆一 新奸状 学芸書林

江戸時代図誌 筑摩書房※
9 日光道 同 ※
21 南海道 同 ※
22 西海道 一 同 ※
1 京都 一 同
4 江戸 一 同
9 日光道 同
16 東海道 一 同
20 山陽道 同
21 南海道 同
22 西海道 一 同
世界地名大辞典
4 アメリカ・オセアニア 1 朝倉書店※
5 同 2 同 ※
6 アジア・アフリカ 1 同 ※
7 同 2 同 ※
8 同 3 同 ※
講座比較文化
1 日本列島の文化史 研究社
3 西ヨーロッパと日本人 同
7 日本人の価値観 同
上田正昭編
日本古代文化の探究 都城 名著出版※
大井川正己
新しいヨーロッパを見て 大井川正己
同 新豪州連邦アジア南太平洋の展望 同
海音寺潮五郎
日本史探訪 15.16集 角川書店※
体系日本史叢書
4 法制史 山川出版※
7 土地制度史 同 ※
14 流通史 同 ※
人物叢書 170 福沢諭吉 吉川弘文館

日本庶民文化史料作成 15 別冊
三一書房※
図説日本の歴史
14 近代国家の展開 集英社※
15 明治日本の開花 同 ※
16 大正新帝国の登場 同 ※
日本の歴史
26 日清・日露 小学館※
27 大正デモクラシー 同 ※
29 労働者と農民 同 ※
論集日本歴史
3 平安王朝 有精堂※
生活の世界歴史
2 貴土を拓いた人びと 河出書房※
8 王権と貴族の宴 同 ※
G. スミル・ノフ
メンデレーエフ伝（ブルーバックスB－285）
講談社※
直良信夫 峠と人生（NHKブックス253）
日本放送出版協会※
飯塚浩二著作集
10 満蒙紀行 平凡社

社会科学

現代社会学大系
4 社会組織論 青木書店※
5 社会学論集 同 ※
7 史的唯物論 同 ※
8 知識社会学 同 ※
10 精神自我社会 同 ※
11 社会学の現代的課題 同 ※
13 社会理論と機能分析 同 ※
14 社会体系論 同 ※
15 性格と社会構造 同 ※
福島議会史編さん委員会
福島県議会史・昭和編・第5巻 福島県議会
就職受験対策研究会編
大学・就職・面接・作文 52年版 増進堂
大学・就職・常識対策 52年版 同

世界の女性史
4 愛の世界の女たち 評論社※
6 忍従より自由へ 同 ※
11 ロシア 1. 大地に生きる女たち 同 ※
15 サリーの女たち 同 ※
17 革命の中の女性たち 同 ※
社会学講座
11 知識社会学 東京大学出版会※
NHK市民大学叢書
35 デモクラシーの構造
日本放送出版協会※
37 改訂版．現代日本の教育 同 ※
矢野恒太記念会編
日本国勢図会 1976 国勢社※
日本性教育協会編
青少年の性行動 小学館※
高崎裕士他
梧と日本人（NHKブックス254）
日本放送出版協会※
文部省編 昭和50年度 我が国の教育水準 文部省※

近代国語教育大系
8 大正期V 光村図書※
9 同 VI 同 ※
11 昭和期II 同 ※
12 同 III 同 ※
15 同 VI 同 ※
Tom Montag
The Urban Ecosystem ; A Holistic Approach Wiley

自然科学

時実利彦 生命の尊厳を求めて みすず書房※

藤井 旭 星雲星団ガイドブック 誠文堂新光社※

同 星座ガイドブック.秋冬編 春夏編 同 ※

高橋 実 月面ガイドブック 同 ※

関 勉 彗星ガイドブック 同 ※

佐竹一夫 血液の科学 河出書房

シリーズ新しい応用の数学
4 常微分方程式の数式処理 教育出版
5 曲線と曲面 同

湯浅光朝 249 物質の探究 日本放送出版協会

日本流星研究会編
流星観測ガイドブック 同 ※
パトリック・ムーア
火星 同 ※
スカイ＆テレスコープ天文選集
星の光 3. 4. 5. 8 白揚社
M. L. Mc Glasnan
SI単位と物理化学量 化学同人
清原迪夫 痛みと人間（NHKブックス252）
日本放送出版協会
生命の科学シリーズ
5 生命現象と調節 同
新生物学シリーズ
7 動物の体液 河出書房
化学モノグラフ
25 エネルギーとエントロピー 化学同人
水文学講座
13 森林水文学 共立出版
基礎物理学選書
16 電磁気学の基礎 裳華房※

実験のポイント（定量法・実験法註解）
同（第2集） 外国文献会

竹内 啓 確率分布と統計解析 日本規格協会

松本淳治 眠りとはなにか（ブルーバックスB－281）
講談社
鈴木正男 過去をさぐる科学（同 B－282） 同 ※

草野禮司 物理革命はいかにしてなされたか
（同 B－283） 同 ※
中村政雄 気象資源（同 B－285） 同 ※

C. ポナムペルマ編
地球外文明をさぐる（同B－287） 同 ※

大木幸介 人間栄養学のすすめ（同B－289） 同 ※

大槻義彦 原子を見た （同B－290） 同 ※

小西浩二他
歯を守る （同B－292） 同 ※
応用数学講座
13 変分法 コロナ社

基礎数学選書
9 ベクトル解析 裳華房※
現代化学シリーズ
52 メカノケミストリー概論
科学技術庁資源調査書編 東京化学同人
英和.和英.水文用語集 水利科学研究所
H.Braknage
Automata Theory and Formal Languages 2nd Gl Conference Lecture Notes in Computer Science Springre –Verlag
Sneila A Greibacn
Theory of Program Structures Scnemes Semantics. rerificat-ion Lecture Notes in Compu-ter Science 同
K.Yosida Functional Analysis. Fourth Edition 同
A.Blikle Lecture Notes in Computer Science 28 Matnematical Founda-tions of Computer Science 同
I. G. Macdonald
Algebraic Geometry Introducti-onto Schemes Benjamin
Donala F Morrison
Multivariate Statistical Methods Mc Grew–Hill
C.Bonm λ Calculus and Computer Science Theory Springer – Verlag
Herivel John
Joseph Fourier Oxfora
Roger H. Farrell
Techniques of Multivariate Calculation Springer – Verlag
本多光太郎
新制物理学本論 上・下 内田老鶴圃新社※
守田 栄 新版.騒音と騒音防止(第2版) オーム社※

工学・技術

福島県企業局編
昭和46年度 小名浜臨海工業団地造成工事報告書 1. 2 福島県企業局
同 昭和47年度 (同 3) 同
同 昭和48年度 (同 4) 同
同 昭和49年度 (同 5) 同

舟阪渡編 石油機器分析の実際 南江堂

日本鋼構造協会 第9回大会研究集会 マトリックス構造解析法 研究発表論文集 日本鋼構造協会
大石不二夫編
理工英語小辞典 三共出版
大西 清 JISにもとづく機械製作図集 理工学社
公害防止の技術と法規編集委員会
公害防止の技術と法規 (騒音編) 産業公害防止協会
国井大蔵 化学工学要論 養賢堂
化学工学協会編
ケミカル・エンジニア・その仕事と生活 東京化学同人
土木学会編
水理公式集・例題集 6冊 土木学会※
米谷栄二編
土木計画便覧 丸善
NC ハンドブック編集委員会
NCハンドブック 日刊工業

第18回建設省技術研究会報告 建設省
同 第19－第23回 同

等々力徳重編
広範機械用語辞典 日本機械学会
服部敏夫 機械工学標準問題と解析 技報堂
S チモシエンコ
工業振動学 東京図書
妹沢克惟 振動学 現代工学社
わかりやすい機械講座
7 機械材料 明現社
本間仁 他 新版 流量計算法 工学図書

磯田和美 解説 河川管理施設等構造令(案) 山海堂

下水道講座
3 ポンプ場の設計と考え方 鹿島出版会※
榎本信 他 環境アセスメント実施論 公害対策技術同友会
環境アセスメントの手法と実例資料集 フジテクノシステム
和田忠太 着想メカニズム設計 テクノ

長岡金吾 機械材料学 工学図書

ホウドレ・モント
鉄鋼材料の基礎 内田老鶴圃新社
東京電気大学編
最新 機械材料 東京電機大学出版局
岡野修一 活用自在 機械データ便覧 オーム社

研野和人 自動設計法 (現代 自動制御双書 3) コロナ社
西山善次 他編
金属の電子顕微鏡 写真と解析 丸善
幸田成康編
100万人の金属学 基礎編 アグネ社
三島良績編 同 材料編 同

作井誠太編 同 技術編 同

杉田稔 機械材料の選び方・使い方 新版 日刊工業
平松孝二訳
技術評価の工学入門 オーム社
向坊隆 他 エネルギー論 岩波書店

井口信洋 機械材料の基礎 昭晃堂

井町勇編 機械振動学 朝倉書店

国鉄大阪工事局編
山陽新幹線工事誌・岡山・大門間 日本鉄道施設協会
通産技術資料調査会編
電気技術要覧 1976年度版
通産技術資料調査会
川本銑万 応用弾性学 (大学講座・土木工学3) 共立出版
伊藤学 構造力学 (森北土木工学全書 3) 森北出版
福田武雄 鉄筋コンクリート理論 (2冊) 生産技術センター
J. アルベルツ編
写真測量ハンドブック 画像工学研究所
豊沢豊雄 特許 実用新案 意匠 商標 出願の手続 日本法令
セメント技術年報 昭和50年
セメントの常識 セメント協会

ギャラガー 有限要素解析の基礎 丸善
D.C.Leign
非線形連続体力学 共立出版

土質工学会編
土留め構造物の設計法 (土質基礎工学ライブラリー 11) 土質工学会
事業普及委員会編
土工. 基礎工の安全管理と災害事故対策 同
土質工学会編
第20回土質工学シンポジウム 昭和50年度発表論文集 同
同 第10回土質工学研究発表会 昭和50年度発表講演集・土の試験調査書 同

理工学基礎講座
8 電磁気学概論 朝倉書店※
9 原子物理概論 同 ※
15 固体力学 同 ※
18 流体力学 同 ※
22 量子力学 同 ※
25 原子核物理 同 ※
演習工科の数学
1 微分・積分 培風館※
2 線形代数ベクトル解析 同 ※
3 微分方程式 フーリエ解析 同 ※
4 複素関数 同 ※
5 統計 数値解析 同 ※
交通工学 3 改訂 交通流理論 技術書院
4 推計学の交通工学への応用 同
5 電子計算機の交通工学への応用 同
11 増補 交通調査用機器 同
12 交通量の変動 同
13 道路工学と写真測量 同
16 道路の線形設計 同
17 増補 道路設計における透視図法 同
27 交通信号 同
29 交通事故とその対策 同
35 道路交通情報 同
日本機械学会講演論文集
No. 760－12 日本機械学会
No. 760－13 同
No. 760－14 同
No. 760－15 同
No. 760－16 同
No. 760－17 同
福本基一 他
騒音対策と消音設計 共立出版

共立全書 86 機械力学 同
136 機械力学演習 同

岡田宗編　工業英語便覧　日刊工業新聞社

前川純一　建築音響　共立出版

桜井捷海　研究社と技術者のためのミニコン技術入門　同

Hetzel　プログラム テスト法　近代科学社

ロイ・マン　都市の中の川　鹿島出版会

野口尚一編
材料力学演習 1　森北出版※

小堀為雄　応用土木振動学　同

土木学会衛生工学委員会
第1回 衛生工学研究討論会講演論文集
1964～125　土木学会
第7回　1971－30－31　同

和栗明 他　要訣 機械工作法　養賢堂

石田四郎 他
大学課程機械材料　オーム社

鳥海 勲　地盤工学（新しい建築工学 6）共立出版

鉛の耐食性防食材料としての手引き
日本亜鉛需要研究会

舟阪渡編　燃料分析試験法　南江堂

電子顕微鏡学会関東支部編
走査電子顕微鏡（基礎と応用）共立出版

藤井清光 他
エネルギーを考える（NHKブックス256）
日本放送出版協会※

益本仁雄 他
短波に強くなる（ブルーバックス 286）
講談社※

エンジニア・リング・サイエンス講座
3　感覚と工学　共立出版
4　電子計算機のための数値計算学　同 ※
13　流れと熱の工学　同 ※
15　材料科学　同 ※
16　物質移動論　同 ※
20　線形回路論　同 ※
26　土と力学　同 ※
32　社会システム　同 ※

ブルーバックス
294　船の科学　講談社※

コンピュータ基礎講座
1　コンピュータ基礎論　昭晃堂

コンピュータ概論
1　コンピュータシステム　筑摩書房
2　同　同

日本機械学会
機械図集・歯車（上巻）　日本機械学会

土木施工法講座
5　橋梁下部構造施工法　山海堂

波木守 他　プラスチックコンクリート
高分子刊行会

道路橋下部構造設計指針
場所打ちぐいの設計施工編
日本道路協会

同　ケーソン基礎の設計編　同

同　橋台 橋脚 直接基礎の設計編　同

同　調査および設計 一般編　同

浄水場排水処理施設 設計指針解説
日本水道協会

E.G. Manes
Lecture Notes in Computer Science 25 Category Theory Applied to Computation and Control　Springer－Verlag

G.C.Sin　Prospects of Fracture Mecnanics　Noord Hoff

Herbert Fox
Urban Technology a Problems
Marcel Dekker

同　同　a Second Primer on Problems　同

Melville C.Brancn
Urban Planning Theory
Wiley

S. Timosnenko
Vibration Problems　同

W. M. Kays
Convective Heat and Mass Transfer　Mc Graw－Hill

M. Cnatterji
Environment. Regional Science and Interregional Modeling
Springer－Yerlag

Proceedings of The Eighth International Conference on Soil Mechanics and Foundation Engineering 1973
USSR N,S,M,F

同　同　Vol 1－1　同
同　同　Vol 1－2　同
同　同　Vol 1－3　同
同　同　Vol 2－1　同
同　同　Vol 2－2　同
同　同　Vol 3　同
同　同　Vol 3　同
同　同　Vol 4－1　同
同　同　Vol 4－2　同
同　同　Vol 4－3　同

産　業

昭和49年度国際電信電話年報
国際電信電話㈱

児玉隆也　テレビ見世物小屋　いんなあとりっぷ社※

藤田仁太郎
英和貿易産業辞典　研究社

長澤正雄 他
産業シリーズ 農薬の化学　大日本図書

永澤勝雄　果物のたどってきた道（NHKブックス248）
日本放送出版協会※

芸　術

関四郎 他編
体育授業シリーズ　球技指導ハンドブック
大修館書店

神道美術　神々の美とその展開　角川書店※

金子桂三 他
地獄絵　毎日新聞社

佐藤友久 他
スポーツの基礎的トレーニング
大修館書店

日本の仏画
第1期 2巻 国宝 普賢菩薩像
学習研究社
第2期 3巻 国宝 普賢延命菩薩像　同
第3期 4巻 国宝 阿弥陀三尊像・蓮華三昧院　同

新修 日本絵巻物全集
3　信貴山縁起　角川書店※
5　伴大納言絵　同 ※
7　地獄草紙 餓鬼草紙 病草紙　同 ※
11　一遍聖絵　同 ※

語　学

田崎清忠　教師のための英語会話　大修館書店

奥津彦重　和独辞典　白水社

外山滋比古
日本語の感覚　中央公論社※

読売新聞社編
日本語現場　第一・二集　読売新聞社※

正宗敦夫編
伊呂波字類抄　風間書店

井上義昌編
英米故事伝説辞典　富山房

旺文社編　英和中辞典　旺文社※

日葡辞書　勉誠社

Write Better Speak Better
Readers－Digest

How to Increase Your Word Power　同

Helen Barnard
Advanced English Vocabulary Workbook 1
Newbury House

T.M.Bernstein
Bernsteins Rererse Dictionary
The New York Tlms Book

新釈漢文大系
77　世説新語中　明治書院※

文　学

司馬遼太郎
空海の風景　上巻・下巻　中央公論社

D. シュトゥッケンシュミット
ドイツのフォークロア　南江堂

吉行淳之介
　　鞄の中身　講談社※

谷村幸男　エソダとサガ・北欧古典への案内　新潮社※

埴谷雄高　死霊　講談社※

檀一雄　火宅の人　新潮社※

加藤憲市　英米文学植物民俗誌　富山房

世界の文学
　6　ミラー　集英社※
　11　サルトル・カミユ　同　※
　14　バヴェーゼ　同　※
　18　マードック　同　※
　19　シリトー　同　※

土とふるさとの文学全集
　1　土俗の魂　家の光協会※
　2　土の哀歌　同　※
　4　土に生きる　同　※
　5　反青の路線　同　※
　6　雲と青空と　同　※
　7　記録と目と心　同　※
　9　歴史の視野　同　※
　10　理想と抵抗　同　※

伊藤整全集
　1　雪明りの路・冬夜.他　新潮社※
　2　青春.他　同　※
　3　街と村・霧氷.他　同　※
　4　得能五郎の生活と意見・得能物語　同　※
　5　鳴海仙吉・火の鳥　同　※
　6　少年・若い詩人の肖像.他　同　※
　7　花ひらく・誘惑.他　同　※
　8　犯罪・泉　同　※
　9　虹・花と匂い　同　※
　10　発掘・変容　同　※
　11　年々の花・同行者　同　※
　12　裁判.他　同　※
　13　新心理主義文学.他　同　※
　14　小説の運命.他　同　※
　15　感動の再建.他　同　※
　16　小説の方法.他　同　※
　17　小説の認識.他　同　※
　18　求道者と認識者.他　同　※
　19　夏目漱石・森鷗外.他　同　※
　20　谷崎潤一郎・川端康成.他　同　※
　21　伊藤整氏の生活と意見　同　※
　22　女性に関する十二章　同　※
　23　自伝的スケッチ.他　同　※
　24　知恵の木の実.他　同　※

日本の詩歌
　1　島崎藤村　中央公論社※
　2　土井晚翠・薄田泣菫・蒲原有明・三木露風　同　※
　3　正岡子規・伊藤左千夫・長塚節・高浜虛子・河東碧梧桐　同　※
　5　石川啄木　同　※
　6　島木赤彦・古泉千樫・中村憲吉・土屋文明・岡麓　同　※
　7　太田水穂・前田夕暮・川田順・木下利玄・尾山篤二郎　同　※
　8　斎藤茂吉　同　※
　9　北原白秋　同　※
　10　高村光太郎　同　※
　11　釈迢空・会津八一・窪田空穂・土岐善麿　同　※
　12　木下杢太郎・日夏耿之助・野口米次郎・西脇順三郎　同　※
　13　山村暮鳥・福士幸次郎・千家元麿・百田宗治・佐藤惣之助　同　※
　14　萩原朔太郎　同　※
　15　室生犀星　同　※
　16　佐藤春夫　同　※
　17　堀口大学・西条八十・村山槐多・尾崎喜八　同　※
　18　富沢賢治　同　※
　19　飯田蛇笏・水原秋桜子・山口誓子・中村草田男・萩原井泉水　同　※
　20　中野重治・小野十三郎・高橋新吉・山之口貘　同　※
　21　金子光晴・吉田一穂・村野四郎・草野心平　同　※
　22　三好達治　同　※
　23　中原中也・伊藤静雄・八木重吉　同　※
　24　丸山薫・田中冬二・立原道三・田中克己・蔵原伸二郎　同　※
　25　北川冬彦・安西冬衛・北園克衛・春山行夫・竹中郁　同　※
　26　近代詩集　同　※
　27　現代詩集　同　※
　28　訳詩集　同　※
　29　短歌集　同　※
　30　俳句集　同　※
　別巻　日本歌唱集　同　※

久曽神昇 他編
　物語和歌総覧　本文編　風間書房

特選 名著復刻全集近代文学館
　柳橋新誌二編　全　ほるぷ※
　柳橋新誌　完　同　※
　新体詩抄　初編　同　※
　十二の石塚　同　※
　雪中梅　上・下　同　※
　夏木立　同　※
　蓬莱曲　同　※
　文学者となる法　同　※
　落梅集　同　※
　あこがれ　同　※
　獨逸（坊っちゃん）　同　※
　うた日記　同　※
　NAKIWARAI　同　※
　小説発展　同　※
　留女　同　※
　瑠璃集　同　※
　東京景物詩及其他　同　※
　日本橋　同　※
　碧梧桐句集　同　※
　俄俳師　同　※
　性に眼覚める頃　同　※
　同志の人　同　※
　死刑宣告　同　※
　集詩　雪明りの路　同　※
　太陽のない街　同　※
　浅草紅団　同　※
　機械　同　※
　聖家族　同　※
　盲目物語　同　※
　故旧忘れ得べき　同　※
　作品解題　同　※

新選 名著復刻全集近代文学館
　当世書気質　同　※
　浮雲　第1.2篇　同　※
　二人比丘色懺悔　同　※
　小説　尾花集　同　※
　若菜集　同　※
　武蔵野　同　※
　みだれ髪　同　※
　海潮音　同　※
　吾輩は猫である　上・中・下　同　※
　破戒　同　※
　野菊の墓　同　※
　田舎教師　同　※
　一握の砂　同　※
　お目出たき人　同　※
　思ひ出　同　※
　刺青　同　※
　土　同　※
　赤光　同　※
　こゝろ　同　※
　道程　同　※
　雁　同　※
　すみだ川　同　※
　あらくれ　同　※
　羅生門　同　※
　大津順吉　同　※
　生れ出る悩み　同　※
　たけくらべ　同　※
　赤い蠟燭と人魚　同　※
　痴情詩集　同　※
　青猫　同　※
　注文の多い料理店　同　※
　伊豆の踊り子　同　※
　蟹工船　同　※
　濹東綺譚　同　※
　風立ちぬ　同　※
　新編　路傍の石　同　※
　山鳥（永日小品）　同　※
　作品解題　同　※

精選 名著復刻全集近代文学館
　東京芸者の一日　同　※
　雀　同　※
　自然と人生　同　※
　放浪記　同　※
　悲しき玩具　同　※
　感情装飾　同　※
　春は馬車に乗って　同　※
　腕くらべ　同　※
　春　同　※
　有明集　同　※
　運命　同　※
　輝夜姫　同　※
　伸子　同　※
　葛野聖　同　※
　金色夜叉　前編・中編・後編　続々編　同　※
　三四郎　同　※
　小説神髄　第1冊－9冊　同　※
　晩年　同　※
　幽秘記　同　※
　作品解題　同　※
　或る男　同　※
　時は過ぎゆく　同　※
　如何なる星の下に　同　※
　在りし日の歌　同　※
　春琴抄　同　※
　海に生くる人々　同　※
　株備の言葉　同　※
　月に吠える　同　※
　或る女　前編・後編　同　※
　夜の光　同　※
　邪宗門　同　※
　春と修羅　同　※

青年　同 ※
病める薔薇　同 ※

日本古典文学全集
5　真言集 4　小学館※
10　落窪物語　堤中納言物語　同 ※
17　源氏物語 6　同 ※
24　今昔物語集 4　同 ※
44　近松門左衛門集 2　同 ※

筑摩世界文学大系
56　ヴァレリー・クローデル　筑摩書房※
67　ジョイス 1　同 ※

岩波講座・文学
3　言語　岩波書店※
4　表現の方法 1.世界の文学 上　同 ※
7　同　4.日本文学にそくして　同 ※
9　同　6.研究と批評 上　同 ※

鏡花全集 別巻　岩波書店※

鑑賞日本古典文学
11　栄花物語・紫式部日記　角川書店※
24　中世評論集　同 ※
25　南島文学　同 ※
26　御伽草子・仮名草子　同 ※
32　蕪村・一茶　同 ※

NHKブックス
251　中世の歌人たち　朝日新聞社※

NHK大学叢書
日本近代文学 明治・大正期　日本放送出版協会※

吉川幸次郎全集
第21巻 補篇 1　筑摩書房

斯波六郎 文選読本の研究　斯波博士退官記念事業会

Peter Quennell
A History of English Literature
Merrlam

Jeffey Meyers
George Orwell The Critical Heritage
Routledgeskeganpaul